

同人誌 (2017年7月号)

風 狂

風 狂 の 会

詩

仮名文字	高 裕香
顔	北岡 善寿
吝嗇を知る人へ	高村 昌憲
護佐丸	出雲 筑三
<small>エンブレム</small> 赤い 帽子 の男	長尾 雅樹
お螻蛄 と爺さん	なべくら ますみ
幸福の王子	原 詩夏至

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

LL教育の源流を訪ねて	神宮 清志
-------------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（二）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年6月号）

梅雨の空 雨音聞いて
硯に向かい仮名文字つづれば
清き流れのように いにしえと向かう

日本初の手習い歌は
百濟からの渡来人王仁博士が
仁徳天皇に奉った 「なにはづのうた」

万葉仮名からの草仮名「あめふりうた」
江戸時代からの「いろはうた」
明治時代に公募で選ばれた「とりなくうた」

いずれも無心につづれば
無常の心
万物への愛 平和の心が宿る

微熱でもあるようにぼーっと
赤みのさした顔がある
何かの集まりのとき
鼠色のハンチングを被って
片隅に立っていた
すらりと高い寡黙な男
背負っているものが重すぎて
何もいう気になれず
ぼーっとしていたのだろう
八月の閃光は地獄であった

それは何十年も前のことだが
この前は詩を書く先生が
車の行き来が激しい大道路の
横断歩道の直ぐ近くで
—あんたは何時もぼーっとしているねえ
と言ってそのまま
信号が赤なのに飛び出そうとして
僕に引き止められた
どこか愉快的な先生のお見立て通り
僕の場合は放射能ではなく
汲めども汲めども水が汲めない
笹の非情な宿命のように
心に溜まるものが何もないのが原因で
言葉に出そうにも出しようがないから
何処へ行っても残念ながら
飲んでもいないのに飲んだみたいな
ぼーっと霞んだ
間抜けな顔をしているしかない

吝嗇家には虚栄心がありません
チラシやポスターを拒絶します
謙遜に努める吝嗇家の敵は雄弁
消費と支出を全て減少させます

謙遜は秘密であり屈辱を拒みます
浪費の心には恐怖しかありません
沈黙があり真の弱さから表します
吝嗇家は騒ぐことさえ許しません

野心家は壁に自分の名前を読み
譬え効き目がなくても幸せです
野心家の行為は歩く方法を笑み
消費し貪り食おうと微笑します

吝嗇はお金を支払うことが難しい
与えることが難しいのと同じです
従って吝嗇は軽率が最も恐ろしい
吝嗇が嫌いなのは目立つことです

法律の真実を愛していながらも
内から外への活動の全てが怖い
発見しながら守る術を知っても
危険も発明も企ても活動も無い

無敵の護佐丸はなぜ死んだ
お前のナカグスク城は現代でも迫力がある
功名に焦る将兵の心理をつく巧みな石垣

勝連城のアマワリは商才と人望があった
かわいそうに十歳の時に親に捨てられたが
優れた統治能力を認められ若き王になった

護佐丸よ
お前がいなければ安堵するのは誰
持ち前の義侠心から主君とは考えたくもないか

アマワリは交易でローマ金貨を手に入れた
千年も...この勝連の地を豊かに収めよ
民の誰もが心から祈祷した

水の怖さを知る護佐丸よ
お前の城は四百五十年の豪雨に耐え
ペリー提督も感嘆した城壁は優雅でさえもある

アマワリは蜘蛛の巣から発想して
漁網を発案した頭のさえる王だ
琉球を治めたら素晴らしい仁政者になったろう

アマワリに援護して護佐丸を滅ぼさせ
そして兵力消耗したアマワリを滅ぼそう
すべては統一王朝のため

権謀術数に明け暮れる琉球王朝
誰のための琉球だったのか
苦戦つづきだった薩摩軍は歓声を上げた

何んにも知りませんよ
遠い昔を懐かしむように
目を細めて語り出す
弦楽器を引き寄せて
ボロンボロンと弾きながら
話の途中は忘れてしまったと言う
頭の上に乗せた赤い帽子を直して
疲れたと言うように首を傾げる^{かし}
わたしゃしがない旅芸人でと
赤らんだ顔が皺の数を読む
裸電球の水車小屋の中で
煉瓦の外れた窓を背にして
若い頃の出来事をぽつりと口説く
知らないものは知らないと
問われるままに答えるしかない
赤い夕陽が崩れた壁から洩れ入って
明るく映える部屋に
旅芸人の男の歩いて来た道を
後光の射す舞台上で語らせるのかと
生きてしまった遠い道のりを
歯車の軋みのように思い出して
そっと目頭を熱くすることだってある
ギターが水車小屋の外へ響く
高原の夜は冷たく暮れてゆく
何を語るにしても夜更は辛い^{よふけ つら}
幼い頃の草原の牛の話や
井戸の脇に咲いていた花の名前や
野宿した時の星座の色なぞを
弾き語りの中でしみじみ語る
サーー ギター弾きの意地を見せようかと

激しく掻き鳴らす老年の血の騒ぎ
それは放浪の旅人の切ない願いなのだ
異邦人の心を抱く金切声が響き
赤い帽子の男に涙の粒が零れる

うらぶれた夢もしがない音色も
みんな赤い帽子の彼方に消えてゆくだろう

スーパーマーケットの地元産野菜売場
不思議そうに床を見つめている老人がいる
私に気づき顔を上げた

こいつ 土の中にいる虫だよ

昔よく見た やわらかい土の中にいた虫
名前が思い出せない
バッタの仲間の あれ
前肢がモグラみたいにしっかりした肢の
あの虫

何処から来たんだろう
こんなところまで

老人は私の顔と床の虫とを代わる代わる見る
虫に覚えはあるけど名前が思い出せない私
この虫は土の中の野菜の根などを齧りはするが
刺したり 強い匂いを発したりはしない筈
私は虫を手で掬った

なつかしい子どもの頃の感触
秋の夜なんかに土の中で ジー っと鳴いていた
掌に載せた虫を老人に見せると

ああ～ ケラだ ケラだった

思い出したことを喜ぶように声を挙げた
私もほっとして おケラを自動ドアの外に放してやった
老人はうれしそうに

良かった良かった　といいながら
買ったばかりの野菜を抱え
スーパーを出て行った

ドアの外はしっかりと舗装されたアスファルト
熱射に目がくらむほど
草一本もない　日影もない
お螻蛄の姿はどこにもない
私はとんでもないことをしてしまったようだ

オスカー・ワイルドの
幸福の王子は
宝石の目玉も
金箔の生皮も
割り抜いては遣り
剥いでは遣り
最後は
滅びた社会主義国家の
レーニン像みたいに
粗大ゴミとして
捨てられたらしいが――

あれは
これから
ますます
無限に善くなっていくに違いない
人間に対する
世界に対する
〈希望〉の表現だったのだろうか？
それとも
結局
ああでもするほか
どうにも
辻褄の合わせようがないだろ？
みたいな
〈絶望〉の表現だったのだろうか？

というより――

人は
〈希望〉を抱いている間は
〈愛〉など
実は
まだ知らないんじゃないのか？
むしろ

〈愛〉とは
人間の
世界の
余りの非道さに
〈希望〉が死に絶え
〈信仰〉も死に絶えた
重い
じとつとした
闇の中からしか
本当は
燃え立たないものなのでは？

俺には分からん
だが
ただ一つ
分かっているのは
俺が
今さっき
全く久しぶりに
あれを読み直したこと――

そして
その時
流れた涙が
若い日
少しだけ流したそれより
遥かに
苦くて
重くて
そのくせ
不思議と
温かったこと――

それだけだ。



三浦 逸雄 「野に立つ少年」 40号（麻布 油彩）

教育といえば語学教育には不可欠なものとなっている。中学校から大学までのどこかで大方の人は経験するだろう。教室というところへ入って、イヤフォンを耳に付けて聞こえてくる外国語に対してマイクで喋るという装置、場合によるとブースという仕切られた空間が設けられているところもある。こうした機械によって外国語を訓練すると、発音が直接ネイティブスピーカーの発音から学べるばかりか、苦手とされる会話の練習が繰り返し何度でも出来るという特典がある。まさに一石二鳥、この教育方法を一斉に取り入れ始めたのは昭和四〇年頃だった。

日本で最初にL L (Language Laboratory) を設置したのは昭和三五年京都産業大学と、もの本には書いてある。しかしその前年昭和三四年に、当時奈良県生駒市にあった防衛庁管轄の「情報学校」で設置されている。この事実が「正史」から除外されているのは、どういう事情によるものか定かではないが、あるいは防衛庁の秘密事項であったのかもしれない。

この時、ソニー（当時「東京通信工業」）とアカイ（赤井電機）から二名ずつ技術者が呼ばれ、二日二晩に涉ってアメリカのL L をスケッチした。各々自社に持ち帰って試作品を作り、納品した結果アカイが採用された。これ以後赤井電機が米軍・自衛隊の受注を一手に引き受けるようになるのは、こうした事情と大いに関係があるであろうことは想像に難くない。

アカイでは、この試作品作りを赤井電機本社では行わず、当時アカイの特殊機器を担当していた「日本電子音響」で行ったという。よって赤井電機の技術部長で、テープレコーダー生みの親である大津光一氏は一切タッチしなかった。当時京王線「初台」駅の近くにあった「日本電子音響」の小さな工場で、アカイの技術部の精鋭・宮本氏、「日本電子音響」の社長・内田氏の二名によって試作品も第一号機も作られた。

慶應義塾大学の語学視聴覚教育研究室が日吉に本格的なL L を設置したのは昭和三八年（一九六三）のことで、技術的にはソニーよりアカイが優れていると見て、鳩首協議の結果アカイが選ばれた。その二年前の昭和三六年に三田にL L を作ったときはソニーが選ばれていた。日吉に本格的なL L を設置するに際し、アカイが選ばれたことにアカイでも大発奮して、社長以下全社を挙げての力の入れよう、例の宮本氏・内田氏も連日連夜現場で陣頭指揮をとったものだった。出来上がったL L 教室は、当時東洋一あるいは世界一とまで言われ、見学者が多数訪れた。

その後AKAI は世界的なブランドにまで発展し、日本一の高給会社と週刊誌に騒がれるほどの著しい成長ぶりを見せた。しかしそれから三〇余年も経過すると、往時の面影はどこへやら、アカイは香港マネーによって買い取られ、L L の生産は打ち切られた。さらにこれまた日本の代表的音響メーカーであった「サンスイ」も香港マネーによってアカイの配下とされてしまったのである。かつてははるかに後塵を拝し、歯牙にもかけなかった東南アジアのマネーによって、世界のアカイが支配され名門サンスイがその支配下になるなど誰が予想し得たであろうか。

以上のとおり日本で最初にL L を設置したのは、昭和三四年自衛隊情報学校である。それではそれ以前の状況はどうか。それ以前においてL L らしきものがなかったわけではない。昭和二〇年代半ば、日本占領中の米軍の中で朝霞に駐屯していた特殊部隊の将校の一人が、「日本電子音響」の内田氏に個人的に注文してきた特殊機器があった。テープレコーダーにあらかじめベトナム語が録音されたテープを掛けて、それをモデルに自分の声を録音して比べながら訓練できるような機械を作って欲しいというのがその主旨だった。

折しもアカイではステレオヘッドを開発し、ステレオテープレコーダーの一号機が試作された時だった。注文に応えるには、ステレオヘッド抜きには考えられない。左チャンネルにモデルが再生され、右チャンネルが録音状態になるように設計し、これを製品化して届けることができた。米軍将校はいたくこれに感心し、次々と注文が来て、三〇台ほど作ったという。この機械は後に大量生産されるLLと方式は基本的に同じである。「これはLLそのものです。日本で最初にLLを作ったのは自分なんだと自負しています」と内田氏が胸を張るのはもったもな事だ。となると、わが国のLLの一号機は昭和二〇年代には出来ていたと見ていいのかもしれない。

この話を聞いて誰しもあっと思うのは、昭和二〇年代半ばに米軍の特殊部隊が「ベトナム語」の習得を急いでいたという事実ではないだろうか。後に米軍が本格的にベトナムに軍事介入することになることを知っている我々にとって、興味深いことではある。この当時はまだベトナムは名目上の独立を果たしたばかりでバオダイ政権が誕生したところであり、この五年後にフランス軍がデイエンビエンフーで大敗を喫し、ベトナムから全面撤退に追い込まれる。米軍が介入するのはその後のことであって、昭和二〇年代半ばに早くもベトナムを視野に入れていたのかと思うと、軍事行動とLLとの意外な関係が見えてくるように思えてならないのである。

さらに目を世界に転じてみると、第二次世界大戦中に米軍はLLを使用していた。ただしテープは当時まだ無く、ワイヤーであった。テープが登場してくるのは戦後のことである。というよりドイツが降伏した時その技術が伝わり、それを期にワイヤーというものは廃品と化してしまったのであった。ということはテープを利用したLLの第一号機の栄光は、ドイツにあると見てよさそうである。

LLによる語学習得という方法は、軍隊と深い関係があることが分かる。新たな戦地に行くとき、その土地の言語を習得することが近代戦では重要である。その時兵隊たちに手っ取り早く会話を習得させる目的で、この方式が進歩してきたと言えそうである。これを教育現場で取り入れてきた。

戦後アメリカではLLの方式がいろいろ登場し、中でもミシガン大学、スタンフォード大学等が熱心に取り組み、しだいにミシガン方式が定着化していった。わが国のLLもミシガン方式によっている。〈完〉

第二章 (その1)

私はボーモンに戻っています。あるいは寧ろそこに到着しているのであり、M少佐と二人きりで町の右側におります。つまり我々がやって来たトゥールからの道と、メッツへ行く大通りの交わる交差点の北側です。垂れ下がった標識が指名しているとおりです。そこには家が二軒ありますが、向かい側にある他の家々よりも壊れておりません。少佐は敵の側にある家の背後に身を隠します。彼は私にそこに幸せな時を残します。彼は言います、「あなたは正面を見張ってくれ。しかし、この時間は安全ではないぞ」。彼は私に尤もなことを言います。私は少しも少佐らしくないと思いますし、不平等でもありません。彼は言います、「あなたの様な人が戦火の前線まで来るのは、好奇心に駆られたからであるのは良く分かっている」。彼はリユーマチで体調が悪いことも私に言いました。それが何であるか私は分かっています。そして彼はつけ加えて言いました、「我々に敵がやって来るかも知れないと考えてはならないのだ」。これは最も賢明な忠告でした。私は最早、この人物とは電話で話すだけの知り合いになりました。それも僅かな時間話すだけです。間もなく彼は大佐になりましたが、厳しくて酷く嫌われた連隊長と見做されていました。その顔は美しいが冷静で、眼は澄んでいて軍人らしい雰囲気がありました。しかし彼が私を決して兵隊として扱わなかったのは事実です。それは市民戦争の時代になったと言わなければなりません。秩序が回復されなくなりました。遠方の権力が既に統治する術を知らず、私は電話が遠方に達しないことをやがて確かめなければなりませんでした。一人ひとりはお自分のために参戦していましたが、それらの様相は無視されていました。それが三ヶ月とか四ヶ月続きました。この志願兵の市民は、そこに熱意と良識で自分の場所を容易に見出しました。しかし、小さな戦争が何時も続くことはあり得ました。その時は、私がやがて知った様に、我々の九五砲兵中隊、一二〇砲兵中隊及び一五五砲兵中隊の大砲は車輪の上に設置されていて、要塞から発射された時代でした。この様にして私たちは砲弾や旧式火薬の莫大な貯蔵を行わなければなりませんでした。そして私たちは一人で二発送り届けました。しかしながら私はこれらのことを偶然に覚えただけでした。

その夜に、真剣で平静な会話をしている中で、私は大砲に関する初歩的な学習を受けました。だんだんと大きくなって来て今まで聞いたことがない奇妙な音によって、砲弾がやって来たことを知りましたが、それは鳥たちの騒々しい鳴き声の様でした。それらの砲弾の音が四種類あったのは何故か私は知りませんでした。それでも大変良く分かりました。私たちの屋根に突っ込んだ後に直ぐに、まるで私たちの鼻先で爆発した様でしたが、他の家も交差点も穴だらけにしています。視界には一人もおりません。その後で、雨後に仕事を行う様に、私たちは仕事をしに行きました。単純なことでした。Wと私の二人は、歩兵隊や砲兵中隊や司令部を順番に、昼も夜も電話をする任務を与えられていましたが、問題は一ヶ月も経つと我が軍よりも優れたものが現れて来たことでした。装置が悪くなったのです。私たちは一人が叫んでいる間に、もう一人は眠りました。すると次のことが生じました。疲労は増大し、周期がより一層短くなり、私たちは一時間眠って一時間目覚めている様になりました。そして、ついに私たちに援兵が与えられた時には、二人とも幽霊に似ている様になりました。

Wは、かなりの怠け者で未大学入学資格者でしたが、良い教育を受けていて大きな家の人でもありました。以上の様な私たちでしたが、最も不明瞭な軋む音の中から言葉を認識するのが重要であるこの困難な仕事にとって、私たちは最高であると思っていました。後で私は、彼が葡萄栽培者であることが分かりました。仕事には巧みになりましたが、彼はその時に幽霊を生んでいた〈連絡先 (Coordonnées) 〉という言葉が原因で、絶望する程苦しんでいました。彼にはその言葉が少しも聞き取れなかったのです。私たち二人にとっての仕事は、軍隊の様式で命令を伝達することでした。つまり決められた言葉でした。文明社会や読書の或る種の習慣がなければなりませんでした。そうすれば私たちは奇跡を生みました。夜間の二回の砲撃を当てにすることが出来ました。そして何時もWは、コルネットを身につける前に、扉が庇護している女性教諭の鏡付き洋装タンスを開けました。私たちには恐怖以上に悪いものは他にありませんでした。

そうしている間に、新しい権力者たちが身を落ち着かせました。砲兵中隊の二人の大尉は、上手い具合に風の当たらない校舎の背後に居続けた歩兵たちを厄介払いして、その地下室にベッドを作り、私たちが今後は黒いテーブルの前に座らされ、その横に一種の食堂を仕上げました。彼らは二人の電話交換兵をちらっと見てから、疲れて茫然となっていて役に立たないと感じました。以上のことによって私たちは散歩するための午後を手に入れました。私たちは電話のことしか知りませんでした。セイシュプレイもフリレイもランビュクールも謂わば抽象的な場所でした。こうして私たちはメッツの道から出発しましたが、砂の散歩道と同じで単調でした。ボーモンはこの道に沿ってあります。バルコニーの様にオ・ド・ムーズ (ムーズ川上流) で囲まれていたり、敵が全て占領している広大な地方を見下ろしているのが長い稜線です。斜面の下には溝があり、ルミエール、ラ・ソナール、モール＝マールといった不気味な名の小さな森が続いています。道は、添え木を付けた葡萄の木の間を進んで行きました。水筒や銃や薬莢やコンビーフの缶詰が全て一緒に見付かりました。そして数々の黒い死体がそこに放置されていました。Wは若者でした。彼はプラトンの弟子の様に死体に引き寄せられていました。私はこれらの事物を近くで見ない様にしていましたし、常に見ませんでした。私は想像力を信用しませんでした。彼は違いました。「この気高い光景を味わってくれ」と私は彼に言いました。彼はそれ以来、眠気を失ったことを私に告白しました。しかし、見るべきものは他に沢山ありました。無傷の砲弾、高さ一メートルの針金の大きな導火囊、道の溝の様に哀れな塹壕、死んだ馬たち、全てが軍事力のしるしです。勿論、生きて人間ではありません。それらの上には余りに美しい空がありました。それが私たちの休暇でした。私たちが常に活動的にフリレイに近づいた時、事態は悪くなりました。私は如何なる危険が作動中の大砲にあるのか知りません。我が軍の砲兵中隊は私たちを越えて発砲していました。敵はルミエールの森を砲撃していました。急いで土手に腹這いになった私たちが見て聞くことが出来たのは、砲弾が樵となって、緑がかった閃光と胸を引き裂く爆発後に、小枝の様に太い枝を吹き飛ばしていたことです。私たちの前方の下の方に、濃い青色の服を着てベレー帽を被った味方の中隊が姿を現しました。恐怖の森へ降りて行く時を待っていたこれらの連中に、私には恐怖のしるしを注視する時間的余裕が十分にありました。その後、休暇中であつた私は、殆ど眼には見えない同じしるしを再び発見しました。戦う種類の間は、犬とか猫の種類と同じで私にははつきりしていました。私自身にも眼鏡の様にこれらのしるしが付いていると思いました。その日は私たちがどんな顔を見せることが出来たのか、私には分かりません。しかし、私たちの状況は要するに我慢出来るものでした。私たちは自分自身を自由に決められ

ますし、私たちの安全に備えなければならないだけでした。私たちが行ったことは、兵士の慎重さと地面のどんなに小さな起伏の知識も迅速に身につけることでした。その様にして素早く地面にぴったりと体を押しつける技術を身につけました。私たちが戻った時には騒ぎは収まっていて、私たちには最早分からないことでした。

この日の昼間の出来事は、私が絶対的権力を仲間に行使していた無政府状態の訓練期間の終了を示しました。そして私たちは、二人の眼に見えない権力による任務に二人共就きました。M少佐とB少佐です。後者のB少佐は一種の重量級の素人で、ベルネクールという地点から明確に間違った権力を行使していました。我々の二人の大尉が彼を嘲笑していても、私が信用されていたことは容易に私には分かりました。B少佐は私と同じ様に一市民であったのだと私は想像しました。彼の仕事は敵を悩ませることでした。その代わりに職業軍人の将校たちは、野営地を横切る食事の運搬人には少しも興味を抱きませんでした。寧ろ彼らは食堂を整えて砲兵中隊の利益にしましたが、私はその仕事に重要性も困難性も直ぐには真価を認めませんでした。差し当たり私は異常な熱意を示しましたし滑稽でもありましたが、B少佐の眼には入りませんでした。彼は私を一種の電話の英雄としてついに見に来ました。そして私を最初は一等兵と呼ばせていましたが、次には上等兵になりました。この少佐は長靴を履いて情熱に溢れた小さなナポレオンであり、異常な熱意も又示していました。そして権力の新組織によって素早く鎮められました。私も又鎮められました。しかし、これは極めて長いものになりましたが、それは二人の大尉が私を考慮に入れてくれたからです。恐らく彼らは私を少佐のスパイとか、あるいはもっと正確に言うなら急進政党の密使と見做していたのです。しかしながら私は公正を欠きたくありません。彼らは、これらの噂話の小細工を笑い飛ばす術も知っていました。両者とも私に対しては意地悪な上官たちに従って、言うことを聞かない恐れは決して持ちませんでした。彼らは私を誠実であると感じていましたし、彼らは間違っていないでした。その後私は、他の上官たちの極めて不当な疑念により、兵隊として何らかの術策も覚えました。しかし結局のところ私が強く感じたのは、取るに足りなかった私自身のことよりも、寧ろ他者たちによる奴隷の身分でした。(つづく)

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる

。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。個人誌「パープル」（一九九六年～二〇一七年）、一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつゞら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェュッシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。

帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年6月号）

ちょっと怖いハナシ：怖い話ですね。勘違いもあるでしょうが・・・霊や妖怪は存在するように思います。こちらの心の状態も大いに関係すると思いますが、妖怪を鎮める方法を知っていると良いと知りました。

アラン『大戦の思い出』（一）第一章：アランは、一九一四年開戦の第一次世界大戦に、志願兵として情熱をもって戦ったことを知りました。電話交換手として、恐怖や危険に身を晒した辛い冬の兵営などなど大戦を思い出して、一九三一年に戦争に反対しながら、決してどんな戦争も繰り返してはならないと書かれてありました。その後一〇年ほどして、第二次世界大戦開戦になったことを知りました。

三浦逸雄の世界（十九）：花瓶に挿された花は、ドライフラワーなのに、やさしく温かく見えました。

汀：美しい岸边、穏やかな情景描写が、水面の天国のように感じました。最後の4行は、白神山地の青池のようでした。

蛙：道標の上に、雨蛙が自分で這いあがったか、誰かの戯れだったか。それはどちらにしても、聖なる森の生ける使いのようにも思えて、森すべてを包み込む、見えない大いなるものに、一礼したのだと思いました。

百の足：見ただけで悲鳴を上げてしまいますよね。ムカデの気持ち悪さ、怖さがよく分かります。それにしても、女性警備員の姿の対比が見事に思いました。

夜を思考する人へ：夜眠れるって、心身にどんなに良いことでしょう。しあわせに思います。また新しく始まるいちにちのために。色々な問題を抱えて、夜眠れないで苦しんでいる人がたくさんいます。どうか心地よい眠りを！と祈るばかりです。

懐旧：陸に住む蟹がいるんですね。私の住んだ村にはザリガニがいました。懐かしい村に小さなベンケイやボロタ蟹が見られなくなって哀れに思います。戦争を知らないけれど、戦争の話を聞いたり、物語を見たりして、平和を願っています。

授業参観：授業参観に、お母さんが来てくれて嬉しい。お母さんにいいところを見せたい緊張した気持ちが、よく伝わってきました。

芭蕉布に芭蕉の花が咲く：「芭蕉布のうた」がもち歌だった友、いい歌ですね。芭蕉の花や実を知りませんでした。芭蕉翁の庵のそばに植えてあった芭蕉にも、花や実がついたのでしょうか。沖縄の情景が浮かびました。

空と海とは共にあるのに：大自然の中であって、人間はどうしてと思います。3連に共感しました。

(以上)

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第36号 (2017年 7月登録)

<http://p.booklog.jp/book/115588>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115588>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト